

新・ワードを捨てて エディタを使おう



QX 正規ライセンス付
エディタ
他、お宝満載!!

CD-ROM付

SCC

鐸木能光 著

新・ワードを捨てて エディタを使おう



鐸木能光 著

はじめに

～その文章、ワードという「特殊ペン」で書く必要がありますか？

きれいな色で文字が書ける特殊なペンがあったとする。太くて重い、柄の所にはダイヤルがついていて、それを操作すると、緑色の文字も、紫色の文字も書ける。不思議なことに、そのペンを使うと、文字だけではなく、絵もきれいに描ける。

ただし、その特殊ペンで書いた文字や絵は、ペンと同じブランドの特殊眼鏡をかけないと読めない。だから、そのペンで書いた手紙を受け取った人は、書いたペンと同じブランドの特殊眼鏡を持っている必要がある。

さて、あなたはこのようなペンを愛用するだろうか？

「そんな面倒なペンなんかいらんよ。絵はともかく、たかが文字を書くだけなら、どこでも売っているボールペンや鉛筆で十分じゃないか」

ほとんどの人はそう答えるに違いない。

ところが、不思議なことに、パソコンの世界ではこの「面倒なペン」を愛用している人が実に多い。それどころか、この「面倒なペン」は知っているが、普通のボールペンや鉛筆は知らないという人がたくさんいるのだ。

「面倒なペン」の名前は、ワープロソフトという。マイクロソフト社のワードや、ジャストシステム社の一太郎などが有名だ。ワードというペンで書いた文書は、ワードという眼鏡をかけないと読めない。

一方、「どこでも売っている普通のボールペンや鉛筆」は、テキストエディタという。手軽で、値段も安価、あるいは無料で手に入る。軽くてサクサク文章が書けるし、書いた文章は誰でも読める。

もしあなたが、ワードや一太郎は知っているが、テキストエディタなんて聞いたこともないというならば、それは「特殊なペン」は知っていても、「あたりまえのボールペンや鉛筆」は知らないということだ。

鉛筆やボールペンの存在を知らないまま、いきなり「特殊なペン」を高く買われ、それだけを使って文字を書いているとしたらどうだろう。

立ち食いそばを食べるにもタキシードで正装しなければいけないと教えられているようなもので、こんな馬鹿馬鹿しいことはない。鉛筆やボールペンの存在を知ったとき、その人は「くそ！ 俺は騙されていた！」と気づくはずだ。

本書は、「重くて面倒な特殊ペン」を使う前に、普通の鉛筆やボールペンを使ってみてはいかがですか？ という、ごくあたりまえの提言をするものである。

さあ、ワードという重い特殊ペンを捨て、ただの鉛筆やボールペンでサクサク文章を書く「あたりまえの自由」を手に入れよう。

新・ワードを捨ててエディタを使おう

目次

■ はじめに

入門編	テキストエディタって何？	1
	テキストエディタとワープロの違い	2
	テキストファイルとバイナリファイル	5
	文字情報だけのファイルをバイナリにする愚	7
	ワープロファイルがオフィスの効率を下げている	9
	テキストを作るならテキストエディタ	10
	<u>知っ得!</u> 拡張子って何？	14
準備編	オンラインソフトを使える環境を整える	17
	オンラインソフトのダウンロードガイド	18
	Lhaplusをインストール	20
	QTClipをインストール	24
	QTClipの基本的な使い方	26
	QTClipの一步進んだ設定と使い方	30
	<u>知っ得!</u> ZIPはファイル？ フォルダ？	33
初級編	エディタで文章を書いてみよう	35
	Windowsの「メモ帳」と「ワードパッド」	36
	編集操作は極力マウスを使わずに行おう	40
	もっと簡単に文書を作成するために	41
	縦書き編集ができるCoolMint	43
	<u>知っ得!</u> ワープロ文書以上のやっかい者「HTMLメール」	46

中級編 ■ エディタを使いこなそう ————— 49

フリーの中級エディタ「MKEditor」	50
表示画面をカスタマイズする	51
エディタの基本的環境設定	54
少し凝った編集機能	57
よく使うフォルダやファイルを登録する	59
豊富なユーティリティツールを内蔵	63
<u>知っ得!</u> ファイル整理術とエクスプローラ裏話	65
多機能で使いやすいNoEditor	72
NoEditorの初期設定	73
よく使うフォルダ・ファイルの登録	75
ユーザー強調定義機能と別表示設定機能	76
NoEditorの独自機能いろいろ	78
NoEditorでホームページをサクッと作る	86
HTML編集は難しいことではない	89
その他、お勧めのテキストエディター一覧	94
テキストファイル便利ツールを使いこなせ!	97
<u>知っ得!</u> 文字コード裏話	105

上級編 ■ 高機能エディタQXの魅力 ————— 137

とりあえずインストールしてみる	143
画面の色などを初期設定	151
「共通設定」のキモ	158
ファイル管理をさらにやりやすくする	172
「書式設定」で執筆環境をさらに詳細設定する	178
縦書きをするならQX	191
自動辞書引き機能	193

強力な検索・置換機能	198
エディタでもこれだけの印刷ができる	199
マクロが広げる無限の可能性	205
キー割り付け・ツールバーのカスタマイズ	212
QXの起動時オプション	219
QXをフルに活用する	221
■ 付録CD-ROMの内容と使い方	227
■ おわりに	231
■ 索引	234

入門編

テキストエディタって何？

テキストエディタとワープロの違い

多くの人は、パソコンで文章を作成するためのソフトは、ワードや一太郎に代表される「ワープロソフト」だと思っている。

しかし、それは間違いである。

ワープロソフトは、「文章を書く道具」ではない。文書をレイアウトし、印刷するためのものだ。

コンピュータで文字を書く道具は、テキストエディタ（以下、単に「エディタ」とも表記）と呼ばれるソフトである。

ファイルに文字を書き込む、文字列や文章を編集するという作業は、コンピュータを扱う上で基本中の基本だから、テキストエディタは、あらゆるソフトの中で、最も基本的なものと言える。しかし、どういうわけか、テキストエディタを使ったこともなければ、存在すら知らないというパソコンユーザーがたくさん存在する。

テキストエディタのほとんどはオンラインソフトで、インターネットを通じて配布されている。箱に入って店で売られているわけではない。これが、パソコン初心者がエディタというものに触れないまま、いきなり市販のワープロソフトを使い始める原因の一つかもしれない。

エディタというものがあることは知っているし、具体的に秀丸*やQXといったソフト名も聞いたことはあるが、実際に使ってみようとは思わない、という人も多い。そういう人たちは、テキストエディタをプログラマーやプロの物書きが使う特殊なソフトだと思い込んでいるようだ。何やら専門的で、一般ユーザーには敷居が高いソフトという認識があるとしたら、それも大きな誤解である。エディタは、ワードや一太郎などのワープロソフトより、はるかにやさしく、使いやすく、合理的にできている。

*秀丸

秀まるお、こと斎藤秀夫氏が作ったWindows用のテキストエディタ。Windows3.1時代から存在し、人気が高い。4000円という、シェアウェアとしてはかなり高額な価格設定だが、企業で一括導入している例もある。斎藤氏は秀丸の成功で脱サラし、オンラインソフト作家の成功例として伝説的存在にもなっている。

エディタもワープロも、文書を作成するためのソフトだ。しかし、似ているようでいて、ソフトの成り立ち、考え方は大きく違う。

一言で言えば、エディタは「書く」ためのソフトで、ワープロは「印刷する」、あるいは「レイアウトする」ためのソフトである。

多くのエディタは印刷機能を持っているが、それはオマケ的なものでしかなく、主眼はあくまでも「文章の作成」にある。

一方、ワープロも「文書を作成するためのソフト」と言えるが、その場合の「文書」というのは「印刷物」を指している。

最近では「印刷」といっても、紙に印刷するとは限らなくなってきた。従来、紙に印刷していたものを、CD-ROMに収めてディスプレイで見るといったこともあるが、その場合でも、レイアウトの工夫や画像の挿入など「印刷物」としての要素が重視されていることに変わりはない。

とりあえず印刷のことは後回しで、文章そのものの作成・推敲を行いたいとき、ワープロは不要である。また、メモのような簡単な文章や、小説、エッセイ、論文のような文字情報だけの文書ファイルをワープロで作成するのは、大砲で蚊を撃つようなものである。

逆に、カラーのポスターやレストランのメニューのような、文字情報が比較的少なく、画像をふんだんに取り込んだ印刷物のファイルは、最初からワープロソフトを使えばよい。

例えば、社内報をワードで作っている会社があるとする。これは「印刷物を作る」作業なので、ワードを使うことは間違っていない。

その社内報に、原稿を書くように依頼された社員が原稿を書き、社内報編集者に送るとする。この原稿をワードで書くのは間違っている。編集者は受け取った原稿をワードなどのレイアウトソフト*に取り込み、他の記事や画像などのコンテンツと一緒に割り付けていくわけで、文字以外の情報は邪魔だからだ。

*レイアウトソフト

ワープロソフトやDTPソフトのこと。DTP（デスクトップパブリッシング）ソフトは、印刷所による本格的印刷のためのものだが、ワードや一太郎などのワープロソフトが肥大化した現在、DTPソフトとワープロソフトの境界線がはっきりしなくなってきた感もある。

何字詰めか、縦書きか横書きか、あるいはどんなフォントを使うかなどということは編集者が決めることであり、元原稿に入っているだけでも困るだけだ。もしも原稿作成者がそうした情報を入れた「原稿です.DOC」などというワード文書をメールに添付して入稿したら、編集者は一旦、そこに含まれるあらゆる書式情報を破棄し、プレーンなテキストファイル*（文字と改行コードだけの情報）に再変換してから原稿を流し込まなければならない。編集者が欲しいのは「テキストだけ」なのだ。

ところが、多くの人たちは、社内報を編集する作業も、原稿を書く作業も、同じワードでやっている。

ワードで書かれ、ワード形式（拡張子.DOC）*で保存された原稿ファイルを編集側でテキストに変換するのは、ワードを持ってさえいればそう面倒なことではないから、大きな問題にはならない。たいていの場合、「次からはテキストで渡してよ」と言えば「なんで?」と訊き返され、「それはね……」と説明する羽目になる。その手間よりも、黙ってテキストに吐き出したほうが楽だから、編集側もいちいち指摘しない。その結果、ワードで原稿を入稿する人は、いつまで経っても自分の間違いに気づかない。

それで大した不都合もないなら別にいいのだが、原稿を書く側も、ワードで書くという作業の段階で、すでに様々なストレスを感じていることが多いのではなかろうか。

操作性が悪い。余計なお世話的な機能が目立ち、素直に文章を書く作業に集中できない。そもそもワードというソフトは重くて、操作が引がかかったように感じる……などなど。

ワードを使っていてそうしたストレスを多少なりとも感じているとしたら、人に余計な負担をかけないだけでなく、自分自身の労力を減らすためにも、エディタを使うことを考えたほうがいい。

*プレーンなテキストファイル

文字情報だけの内容であっても、ワード文書などになると「バイナリファイル」というソフト依存のファイルになる。バイナリファイルは「プレーンなテキスト」とは呼ばない（5ページ参照）。

*ワード形式（拡張子.DOC）

.DOCは「Document」の略であり、以前はこの拡張子は.TXTと並び、広くテキストファイルに使われていたが、ワードがこの拡張子を「強奪した」ため、今では.DOCという拡張子はワード文書と見なされることが多い。

テキストファイルとバイナリファイル

パソコンで扱う文書は、デジタル信号として記録されている。私たちはこれを一般に「文書ファイル」と呼んでいるが、実はファイルには大きく分けて2種類ある。

一つはテキストファイル。もう一つはバイナリファイルと呼ばれるものだ。

こんなことを書くと、「あ～、そんな専門的な話は聞きたくないよ。理屈はどうでもいいから、パソコンで普通に文書が読み書きできればそれでいいんだ」と拒絶反応を起こすかたもいらっしゃるかもしれない。

しかし、この「テキストかバイナリか」という問題こそ、本書の基本テーマである「エディタの勧め」に深く関係している。

「はじめに」に書いた特殊なペンと普通の鉛筆のたとえ話は、誇張でもなんでもなく、本質的にはあの通りなのだ。

ワードなどのワープロソフトでは、文書に画像や表を貼り込んだり、横組みと縦組みを混在させたり、文字の大きさや色を変えたりして、美しい文書印刷ができる。しかし、その文書ファイルは、原則として同じワープロソフトでしか読み込めない。他のソフトで開こうとしても、意味不明の画面になってしまう。これがバイナリファイルだ（図I-1）。

ワープロの独自形式ファイルだけでなく、一般にテキスト以外のファイルはすべてバイナリファイルである。例えば、.EXEなどの拡張子（14ページ参照）を持つ実行ファイルや、画像ファイル、音声ファイルなども、バイナリファイルである。

それに対して、テキストファイルは、文字コード情報だけで構成されたファイルで、極めて汎用性が高い。

コンピュータというものは、数値情報しか扱えない。コンピュータで扱う

文字や画像、音声は、すべて数値化されたデータになっている。

例えば、私の名前「鐸木能光」は、4つの漢字から成っている。「鐸」という字は、JIS第一水準漢字（約3000字）に収録されていて、JISコードでは4278という数値で表される。こうした文字↔数値の変換ルールのことを文字コードといい、テキストファイルは、この文字コード情報のみで成り立っているファイルなのである。

このテキストファイルを作成・閲覧・編集するソフトが、テキストエディタである。

テキストファイルは、文書を扱うアプリケーションソフトならどんなものでも読み書きができる。テキストエディタ、ワープロソフトはもちろんのこと、Internet ExplorerやFirefoxなどのWEBブラウザ、場合によっては画像ソフトでさえテキストファイルは読める（図1-2）。

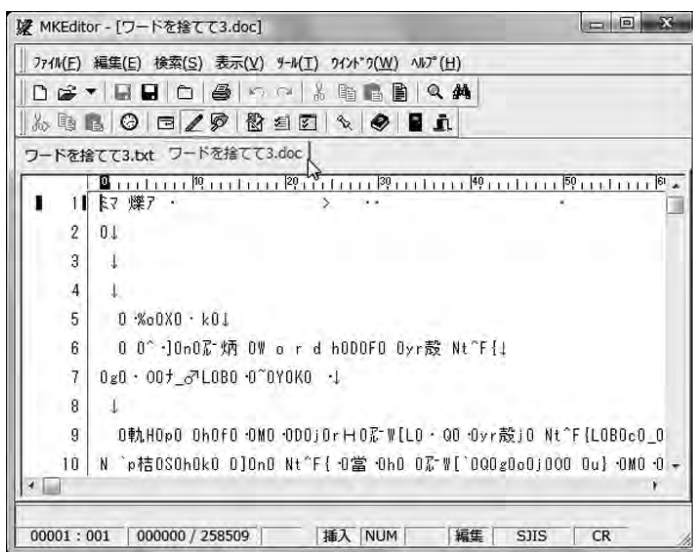


図1-1 バイナリファイルは汎用性が低い
ワード文書をテキストエディタ(MKEditor)で無理矢理開いたところ。まったく読めない

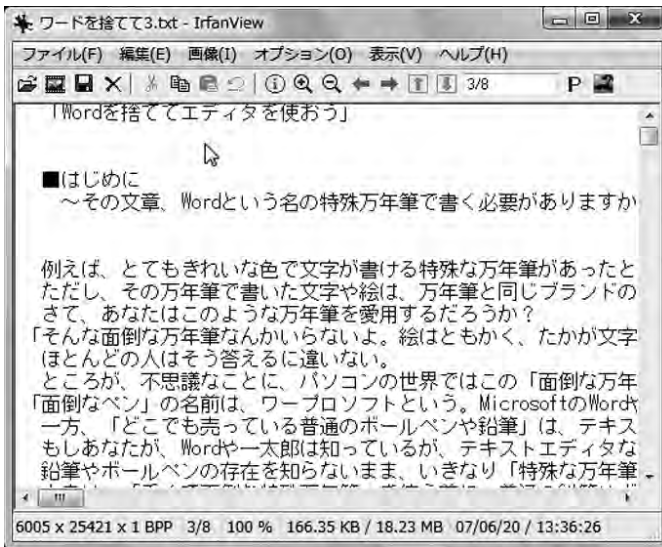


図1-2 テキストファイルは汎用性が高い
テキストファイルを画像ソフト (IrfanView) で開いたところ。画像ソフトでさえ、
テキストファイルは読める

文字情報だけのファイルを バイナリにする愚

ワードなどのワープロソフトで文章を書き、それをそのまま保存すると、ワードの独自形式のファイルが作成される。

文字しか記述しなかったとしても、それはもはやテキストファイルではない。基本的にはワードでしか開けないファイルになり、汎用性が落ちる。

また、同じ内容の文章をワード形式で保存すると、テキスト形式で保存するときよりはるかに大きなファイルサイズに膨れあがる。例えば本書の原稿

はテキスト形式で保存すれば約250KBだが、ワード形式で保存すると約390KBに膨れあがる。

文字だけの情報をバイナリファイル（ワープロ文書）にするのは愚行である。デメリットばかりで、なんのメリットもない。

それでも中には、「世の中、長いものには巻かれろだよ。ちょっと鬱陶しいけれど、ワード形式がデファクトスタンダード*として認められているんだからいいじゃないか」という人もいるかもしれない。しかし、それは甘い考えだ。

ソフトは常にバージョンアップをしている。例えば、最新版のワードで作成した文書が古いワードで読めない、ということがある。同じワードというソフトなのに、ファイル形式はどんどん上位互換になるため、ユーザーは次々に新しいバージョンを買わされる羽目になる。

また、10年後、20年後、50年後のコンピュータ世界がどうなっているかは予想できない。デジタル情報技術にとって、半年前は「一昔」だ。数十年後もワープロソフトの主流がワードであるという保証は何もない。

栄枯盛衰。「そういえば、昔、ワードっていうワープロがあったねえ。あのファイルって、今もサポートしているソフトってあったっけ？」なんていう会話が交わされているかもしれない。

文書をバイナリファイルにして保存するというのは、そのソフトと心中をする覚悟を持つということである。かつて、ワープロ専用機で作成した文書を考えてみればいい。オアシスの文書、ルポの文書、文豪の文書、書院の文書*……どれも、パソコンの時代になった今、読み出しには苦勞させられる。

しかし、テキスト形式に変換してあったデータ*なら、今でも簡単にパソコンに読み込むことができる。これは50年後、100年後でも同じだろう。OSが128ビット処理になっても、ハードディスクの最小単位がテラバイトにな

*デファクトスタンダード

「事実上の標準形式」の意味。もともとは一企業などが提案したローカルな規格であっても、世界中に広まり、採用する企業や利用者が増えると「デファクトスタンダード」になるため、企業は自社製品や自社が考案した規格をデファクトスタンダードにするために必死になる。

*オアシスの文書、ルポの文書、文豪の文書、書院の文書

オアシスは富士通、ルポは東芝、文豪はNEC、書院はシャープのワープロ専用機のブランド名。

*テキスト形式に変換してあったデータ

後期のワープロ専用機には「DOSテキスト変換」という機能が搭載されていた。これは独自形式のワープロ文書ファイルを変換してテキストファイルに変換する機能。この機能を使ってテキストファイルに変換してあれば、今でもパソコンに読み込める。

っても、文字コード体系がすっかり変わってしまったとしても、昔のテキストファイルが読めないという事態にはなっていないはずだ。

また、テキストファイルは、ソフトの垣根はおろか、OSの垣根をも軽く超えられる。WindowsでもUNIXでもMac OSでも、テキストファイルならば確実に読み書きできる。

ファイルの互換性、普遍性という面で、テキストファイル形式に勝るものはない。

ワープロファイルが オフィスの効率を下げている

一時期、社内のあらゆる書類をワープロで体裁よくデザインすることが流行った。

罫線を引き、レイアウトに凝り、社名ロゴなどを貼り込む。そうした書類のテンプレートをワードで作ってしまうと、簡単なメモや伝達事項まで、ワードを使ってそのフォーマットにしなければいけないようなことになる。

最初は、FAXの送付状などというものがワープロで作成され、どうでもいいようなメモにまで大袈裟な送付状がつけられたりするようになる。送付状が作られたのはいいが、記入欄のほとんどは空白だったりする。

稟議書や報告書、伝票なども、ことごとくワードで「きれいなテンプレート」が作成され、それを使うことを強要される。たった数行の文章を記入するだけなのに、ワードが突然起動しなくなったからできない、などということがあつたら、本末転倒もはなはだしい。

企業内では、ハンコがないために簡単な事務処理ができず、仕事が1週間延びてしまったとか、社名入りの封筒が切れてしまい、重要な手紙を出せないというようなことがよく起きる。「きれいな印刷病」「書類依存症」とで

も呼ぶべき「病気」だ。

コンピュータがもたらしたデジタル革命は、本来、紙を使わなくてもいいというメリットを生むはずだった。しかし、実際には、コンピュータが登場してから、ますます不要な書類が増えているのではないかという気がする。

せっかく文字をデジタル情報に変換してデータ化しやすくしたのに、再び紙の上に印刷してアナログ情報に戻してしまったのでは意味がない。どんなに美しく印字されていても、印刷物というものはアナログであり、そのままではデータとして再利用ができない。保存するのもかさばり、果てはゴミになる。

文字情報だけならば、デジタルデータとして残しておくことで、将来、いろいろな形に変換・再利用できるのに、わざわざパソコンとプリンターを使って再利用しにくい形にしているのだ。こんな馬鹿らしいことはない。

テキストエディタ軽視、ワープロソフト偏重の社会は、「文字情報だけにしておけばよいものを、 unnecessaryレイアウトや修飾を施し、再利用しにくい形に変える」という愚行を促進する社会でもある。その社会では、人間はワープロソフトという道具に使われてしまっている。

テキストを作るならテキストエディタ

テキストファイル形式が安心だし、再利用しやすいということは分かった。しかし、ワードでテキストファイルも読み書きできる。大は小を兼ねると言うのではないか。ワードがあれば、別にわざわざエディタを用意する必要などないではないか。

……こう思われるかたもいらっしゃるかもしれない。

しかし、それは違う。

テキストファイルを作成するだけなら、重量級ワープロソフトよりもテキストエディタのほうがはるかに操作しやすく、軽快な作業が行える。

ワードや一太郎などの重量級ワープロソフトは、処理が重いために、作業の途中でフリーズしてしまう確率も高くなる。1日かかって作成した文書を保存する前にシステムがフリーズし、泣く泣く電源を切って文書を喪失したという経験を持つ人は少なくない。

そうした悲劇を防ぐためにも、自動バックアップ*などの対策は必須なのだが、「重い」ソフトを使っていると、自動バックアップが作動するたびに入力作業が引かかったように一瞬止まってしまうこともある。これらのストレスは、文章の出来にも関係してくるだろう。

よくできたテキストエディタであれば、自動バックアップは瞬時に動作するので、いつバックアップしているのか、まったく気がつかない。

テキストエディタは、軽いだけでなく、安心して使える。これは仕事をやる上で、とても大きな意味を持つ。

軽快に動くだけでなく、日本生まれのテキストエディタには、日本語を作成・編集するためのさまざまな工夫がこらされている。

例えば、縦書きでの編集は、ワープロソフトよりも一部のエディタのほうがはるかにやりやすく軽快だ。

ワープロソフトで縦書き編集をする場合、編集画面は印刷確認画面と同じものになる。これは「画像処理」を施して表示している画面なので、印刷体裁と同じ余白が表示されたり、1行の文字数を自由に変更しづらかったり、非常にストレスの溜まる編集作業を強いられる。

また、縦書き文書の中で半角2桁数字などを縦に表示させる（出版・印刷用語で「縦中横（たてちゅうよこ）」という）場合、ワードなどのワープロソフトでは、いちいち縦中横にしたい部分を範囲選択して編集処理をしなければならない（図1-3）。数が多いと大変な手間になる。

***自動バックアップ**

文書編集途中で、定期的に現在の内容をファイルに保存し、停電やシステムフリーズなどに備える機能。

しかし、高機能エディタには、何もしなくても、半角2桁数字や、kg、kmなどの半角英文字2個からなる記号を自動的に縦中横で表示・印刷してくれる機能を持つものがある（図1-4）。

印刷にしても、ルビ振りや多段組、フォントの変更までできる高機能エディタもある。こうなると、「印刷をするなら最初からワープロソフト」とも言いきれなくなってくる。

さらには、マクロ機能*を使って、データベースソフトになったり、ホームページを作成したり、スケジュール管理をしたりという、統合ソフト顔負けの仕事をしてくれるエディタも存在する。

そうした高機能エディタでも、作成されるのはバイナリファイルではなく、互換性に優れたテキストファイルだから、作成したデータの汎用性が高い。

本書の最後では、そうした高機能エディタの代表としてQXというテキストエディタを紹介している。

しかし、高機能エディタの解説をする前に、パソコン初心者でも楽にスキルアップしていけるよう、順を追って必要な知識や方法論をご紹介していきたい。

準備編・初級編・中級編の中には、エディタというよりも、WindowsというOSの基本操作に関する解説もある。あまりにも常識的だと思われる部分は、ご自分の知識や経験に合わせて、適当に読み飛ばしていただきたい。

また、随所に「知っ得！」というコラム風の読み物をご用意した。パソコンを使いこなす上で役に立つと思われるトピックを厳選したので、併せてお読みいただければ幸いです。

*マクロ機能

日本語では「一括処理」などと訳されることもあるが、ユーザーがソフトに新たな機能を加えることができるなど、非常に有用なもの。エクセルなどではおなじみだが、マクロをうまく使えば「別のソフト」のように動かすこともできる。

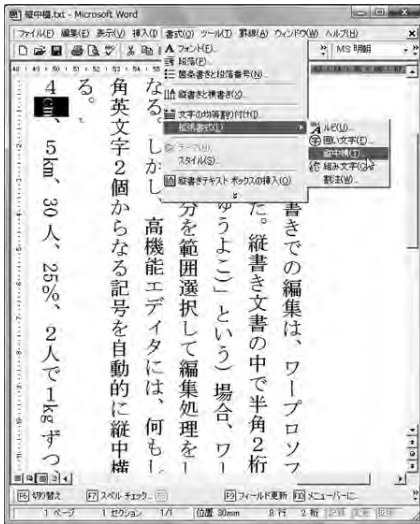


図1-3 ワードでの縦中横

ワードではいちいち縦中横にしたい部分を範囲選択して「書式」メニューを呼び出さなければならない

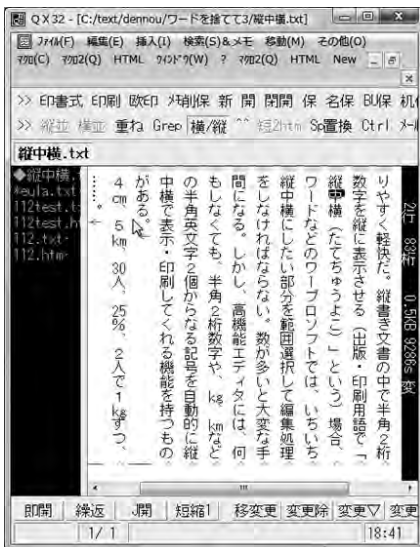


図1-4 自動縦中横編集が可能なエディタ

テキストエディタの中には、半角文字を自動的に縦中横処理して表示・印刷してくれるものもある(QXエディタ)

何かのテレビCMで、こんなシーンがあった。

携帯電話機の向こうにいる息子に、柄本明演じる父親がパソコンのトラブルのことで相談している。息子はそのやりとりの中で、気軽に「拡張子は何になっている？」と訊くが、父親は「ナニ？ カクチョーシ!？」と怒鳴り返す……というもの。

まあ、この父親の気持ちはよく分かる。

意味不明の横文字ばかりが並ぶコンピュータの世界で、「拡張子」というさらに意味不明の日本語？が使われているのも皮肉だ。文字面を見て中国人の名前だと思った、という人もいる。

今さら説明するまでもないが、拡張子とは、ファイル名の最後についている .EXE .TXT などのドット+数文字の英数字のことである。

Windowsでは、拡張子によって、そのファイルがどんな種類なのかを判別しているので、ファイル名には基本的にすべて拡張子が付く。

.TXT ならばテキストファイル、.EXE ならば実行ファイル、.SCR ならばスクリーンセーバープログラム、といった具合だ。

言い換えれば、Windowsは、拡張子のないファイルは、OSが内容を判別できない。ABC.TXT というファイルであれば、テキストファイルであると判断できるので、そのファイルをエクスプローラ*上でダブルクリックすれば、テキストファイルに「関連付け*」されたプログラム（買ったままのWindowsパソコンでは「メモ帳」というテキストエディタ）でそのファイルを開こうとする。ABC.EXE であれば、実行可能なファイル*だと判断し、実行しようとする。ABC.EXE というファイルを強制的に名前を変更して拡張子を取り除き、ABCとしてしまえば、エクスプローラ上でダブルクリックしても実行されない。

これほど重要なものであるにも関わらず、マイクロソフト社はこれを「恥

*エクスプローラ

Windowsのシェルソフト（基幹を形成しているソフト）。主にファイル操作に使われる。デスクトップやコマンドプロンプトなどもエクスプローラの一部。

*関連付け

その拡張子のファイルは〇〇というソフトから開く、という、ファイルの種類とソフトの結び付け。

*実行可能なファイル

.EXEは実行ファイルを表す代表的拡張子だが、ほかにも .BAT .COM .SCR .PIF などがある。これらはウイルスに使われるので、こうした拡張子を持つ添付ファイルが来たメールを受け取ったら注意が必要だ。ウイルスファイルを見分けるためにも、拡張子を常に表示しておくことは重要。

ずかしい尻尾」のようなものであると考えているらしい。その証拠に、Windowsは、初期設定のままだとファイルの拡張子を表示しない設定になっている。これでは、例えば同じ画像ファイルを、GIF、JPEG、BMPの3種類*で保存してあるような場合、エクスプローラ上でどれがどれか見分けがつかない（図1-5）。

エクスプローラの表示設定を変更し、拡張子は必ず表示させるようにしておきたい。この設定は、[コントロールパネル] → [フォルダオプション] → [表示] → [詳細設定] → [ファイルとフォルダの表示] → [登録されて



図1-5 エクスプローラのファイル名表示

初期設定では拡張子を隠しているの、このようにファイルの区別がつかない



図1-6 エクスプローラの表示設定を変更 [コントロールパネル]→[フォルダオプション]→[表示]→[詳細設定]→[ファイルとフォルダの表示]→[登録されている拡張子は表示しない]のチェックを外す

*GIF、JPEG、BMPの3種類

どれも代表的画像形式。GIFはコンパクトな画像向きだが、使える色数が少ない。WEBページの見出し画像やアイコンなどに使われる。JPEGは圧縮形式だが色数が多い。写真画像の標準形式。BMPはWindowsの標準画像形式。非圧縮形式なので、色数の多い画像はファイルサイズが巨大になる。

いる拡張子は表示しない]のチェックを外すことでできる(図1-6。Vista、XP共通)。これでめでたくファイルの拡張子がまともに表示されるようになる(図1-7)

このとき、ついでに、[すべてのファイルとフォルダを表示する]がチェックされていない場合は、これをチェックしておこう。そうしないと、.INIなどの重要なファイルがエクスプローラ上に表示されず、「あるはずのファイルがない!」と錯覚するトラブルを生むことになるからだ(図1-8)。



図1-7 拡張子が表示された状態

上記の設定変更後は、このようにファイル名が正しく拡張子付きで表示されるようになる



図1-8 すべてのファイルを表示させる初期設定のままだと「隠しファイルおよび隠しフォルダを表示しない」にチェックが入っているが、これを外し、「すべてのファイルとフォルダを表示する」をチェックする